

1999年第8回物学研究会レポート

藤森照信 氏（東京大学生産技術研究所教授）講演
「藤森流超近代建築論」

1999年11月18日



BUTSU GAKU
物学研究会
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

第8回物学研究会では、建築史家として独特の建築論を展開される一方、「神長官守矢史料館」、「秋野不矩美術館」など日本古来の伝統や美意識とモダニズムを融合させた新しい建築設計を実践しておられる藤森照信氏をお迎えしました。そして、「タンポポ・ハウス」や「ニラ・ハウス」などの住宅建築のプロセスも交え、藤森流建築論を大いに語っていただきました。その独創的な建築のアプローチとプロセスには、今後のデザインを考える上で大きなヒントが潜んでいるに違いありません。

以下はそのサマリーです。

藤森 照信 氏講演

(東京大学生産技術研究所教授)

「藤森流超近代建築論」



① 藤森照信 氏

自然に寄生する建築

僕は建築でも建築史、特に明治以降の日本建築の歴史を専門に研究をしていました。ところが、私の田舎である茅野市から史料館を建設するということで相談を受けました。その史料館というのは、僕の実家の4軒隣に代々諏訪大社の筆頭神官を務めている守矢家という家があって、その守矢家にまつわる儀式の模様や品々を展示するというものでした。私が建物のデザインをしない場合はだれかを紹介しようと、当初は同じ長野県出身の伊東豊雄氏や原広司氏はどうかなあと考えていたのです。けれどもご存知のように彼らはモダニズムの建築家だし、今回は諏訪大社の神域を扱う建物だし、結局自分でデザインしてみようという気持ちになった。もちろん僕がやる限りはモダニズム建築にはしたくないので、自分が好きな建築を基にしてデザインしようと思い立ったわけです。

さて、僕がどんな建築に感動してきたかということですが、一番初めに浮かんだのはポルトガル北部、スペイン国境近くの丘陵地帯にある不思議な人家でした。この辺りには巨大な石が無数に転がっていますが、この人家は2つの自然にある岩の間に屋根を掛け壁を作り、さらに

窓やら煙突を備えられた素朴な住宅です。中を覗いてみたところベッドがあって、一応カマドのようなものが見えました。住人はアーティストかなんかでしょう、夏にやってきて滞在しているようでした。僕はこれを見て凄く感動しました。なんとなく孫悟空が飛んでくるような家だなと思ったし、建築という人工物と自然の石の関係がすばらしいと感じたのです。似たような自然の一部を利用した建築は他にもありますが、これは僕が最も好きな建物のひとつです。まるでコルビュジェが自分の父親のために作ったような家でもあり、ロンシャンの教会の原型みたいでしょう。

次はギリシャ北部、メテオラ地方の山岳地帯の絶壁に建てられたギリシア正教の修道院です。この修道院は、修道士たちが少しでも神に近いところしかも人家のないところで修行するために中世期に建てられました。昔は道もなく人も物資も籠と縄で吊り上げていたようなところです。これは先の例と似ていて大自然の一部である絶壁にへばりつくように建っていますが、僕は余り好きではありません。ヨーロッパ人は美しい峰に神が住んでいるとは思えませんから、平気でこうした岩屋に巨大な建物を作ってしまうのでしょうか。僕にしてみれば、地上では人間が中心だという一種の傲慢さを感じます。ポルトガルの家の方が謙虚だし、人間が自然に寄生しているという感じが気に入っています。

僕は、人間が自然界の中に入っていくということは「自然に寄生すること」なのだと常々感じています。逆に大都市のような人工物の中に自然が入ってくる場合は、「自然が人間に寄生する」。最近は共生という言葉が言われますが、嘘っぽいと思います。寄生は共生と違って、片方が圧倒的に有利な状況にある場合に、有利な方が寄り添ってきたものに対して責任が伴いますし、逆に寄り添ってきたものは謙虚さを忘れてはならない。こういう関係が美しいのだと考えます。

さて、日本の場合では、大久保石材店が一番好きです。昭和初期のものですが、当時の当主が大谷石の山を削って採石していたところ、ふと思いついて自分の部屋を作ろうと延々と岩盤を削ってできたものです。建物は地球の一部であり、地球を基礎としてできています。部屋の中は削ったままであり、シームレスでディテールがない。まるで仙人が住んでいるようなすがすがしさがとても好きです。



② 大久保石材店

森村流建築実践パート1、自然素材にこだわる

●神長官守矢史料館

このように僕は自然にそっと身を沿うような建物を作りたいと考えました。

「神長官守矢史料館」では、展示に関しては守矢家が伝えてきたもの、そして同家が司どってきた最も重要な祭祀である「御頭祭」の様子を再現することで大方決っていました。この「御頭」の意味ははっきりしていませんが、生贄などの血腥い伝えもあって、どちらにしても非常に原始的なものであったようです。展示内容がこうですから、僕はモダン建築ではないやり方を選びました。とはいっても博物館である以上、機能的には耐震、耐火に配慮して基礎はコンクリートです。最大のテーマは仕上げで、なるべく工業材料を使わないようにしました。まずガラスは、スタンドガラスの要領で15センチほどの昔ながらの手吹きガラスを鉛枠でつないでいくという方法を採用することで解決しました。屋根葺き材は地元の鉄平石を使いました。

一番苦労したのは板材です。とにかく工業材料は使わないという方針だったので機械は使えない。昔のことを調べてみると、戦前まで地元では機械を使わないで屋根用のシングルという屋根葺き材の木っ端を割っていたことがわかりました。そして現代でも唯一人その技を持っているというおじさんがいて、当時の道具を持っているし、まだ割れるということでお願いしました。道具はごく簡単で、まず鉋で板の横から割れ目を入れます、するとひびが入って、その部分に鉄の楔を打ちつけながら進んでいくという単純な作業です。ところが割れ目は必ず外へ出ようと作用するので、それを上手に調整しながら割れ目をまっすぐにリードして5センチくらいの厚さに割っていくのは至難の技です。それをさらに半分、半分と割っていったら、最後に5ミリくらいの厚さにまでします。見ているぶんには簡単そうだったので僕も試してみましたが割れ目がべろんと削げてしまいます。このおじいさんは実はすでに引退されていて、3カ月間毎日こつこつと仕事を続けてくださいました。通常、この割板は屋根に使われていたので人が目にすることはできないわけです。ところがここでは壁材として使ったので、おじいさんは自分の仕事が目につくところに使われるのは初めてだとおっしゃってとても喜んでくださいました。僕もその仕上がりには満足しました。工業材料にはない木という自然素材が持っている乱れや不均質さを見事に表現することができたのですから…。壁材としては割板の他に土封じを使いました。この史料館の裏には標高1500メートルの守矢山という神体山があって、冬が厳しく凍結・融解を繰り返すので土壁は崩れ落ちてしまいます。試行錯誤を繰り返して、最終的には藁入りのモルタルの上に土を吹くという方法を編み出しました。



③ 神長官守矢史料館の全景



④ 神長官守矢史料館の壁

このプロジェクトを通じて僕は割板に興味を持ちました。機械製材が行われる前、江戸時代には割板製造には前挽き大鋸を使っていたようです。機械がない時代に板を作るのは大変でした。製材技術から見れば、かつては「柱」よりも「板」が圧倒的なテーマだったはずです。柱は四面削ればいいのですが、板は全部挽かなければならぬ。歴史的に振り返ってみると、弥生時代には割板があった可能性があります。その後鎌倉時代くらいまでは、楔を使って割っていた。そして室町時代には職人が2人がかりでテンションをかけて大鋸で挽いて割板を作っていたのが、江戸に入って前挽き大鋸を使うようになったのです。世界的に見ますと、アメリカンインディアンは石器で板を作っています。彼らは大木の上部と下部分を削って、その削り目から頭の皮を剥ぐように板をはいていたことが確認されています。

●秋野不矩美術館

史料館の後に、僕は天竜市に日本画家の秋野不矩さんの美術館を設計しました。ここは杉の産地だったので、前と同じように杉の割板を使いたいと申し出ました。試しに直径80センチほどの杉の大木を8センチの幅で割ってみたのですが、ぴちぴち音はしているのだけれど一気に割れてくれない。しまいには木の楔を打ち込みながら割れ目を広げるという方法にしてみました。一応真中で割れてはいても沢山の楔を入れて無理やり割っているのだから割れ目が非常に凸凹している。その上、真中からしか割れないので、なんと1本の木から2枚の板しか取れない。結局、壁材に使うことはあきらめて柵とテーブルを作りました。そして外壁に使う割板は機械で製材することにしました。それから土壁です。これは神官長守矢史料館のときにさんざん研究を重ねて、独自の土風モルタルを開発していました。これはまず白セメントに色粉で着色して藁と砂を混ぜて塗ります。その表面にさらに土の泥水を塗りたいことによって、土壁の質感を出すというものです。秋野不矩美術館ではこのような多くの実験を繰り返しながら、壁には杉材と土風モルタルを、屋根には鉄平石を使いました。ところが杉板が工業材料だし上等過ぎて、僕が期待したほどに風化してくれていないのが残念です。室内では、エントランスホールにも杉の柱を立てさらに表面を燃やすことによって荒削りな感じを出しています。床には大理石の原石を7センチくらいの厚さに挽いて敷き詰めて、その隙間には白セメントを詰めました。廊下部分は藤莫蔭を敷いて、拝観者には靴を脱いでもらって足裏の感触を楽しんでもらったり、あぐらをかいて作品を見てもらえるちょっと変わった美術館になっています。



⑤ 秋野不矩美術館全景



⑥ 杉の丸太割の様子

建築に寄生する自然

こうした経験を積んだ後、僕は自然素材を使うということに関しては多少自信を持つようになりました。基本的に骨格には近代的材料を使い、表面を自然素材で包むということです。ところがそれはエスカレートして今度は建築に自然そのものを取り入れたい、自然を取りつかせたいということになってきた。はてさて自然そのものを取り入れた建築例はないものかと見回してみます。まずは、コルビジェのサヴォア邸です。彼はここで屋上庭園を提案しているわけですが、実際はプラントボックスに植物が植わっている程度です。これは単なるアリバイです。彼はその後屋上庭園をやめています。一番の理由は、植物は成長することです。植物は小さいうちはいいが成長するにつれて自分の美学を發揮してきます。建築という人工物の美学と植物という自然の美学は明らかに異なります。つまりある時点を越えたときから、植物の美学をコントロールすることはできなくなるわけです。世界最古の屋上庭園は、大正3年に下関の貿易商秋田商会のビル屋上に作られました。今は文化財になっています。当時の好事家が作ったユニークな茶室と茶庭が配されていますが、建築にビルトインされたせいか何か不釣り合いな感じがします。屋上庭園は下からは見えないし、わざわざ行ってみてやろうという人間も少ないものです。それを克服しようとしたのがステップ状の屋上庭園です。代表的なものとしては福岡にあるE・アンバース原案のアクロス福岡というビルがあります。ところが2時間ほど眺めていましたが、階段状庭園を登る人はほとんどありませんでした。建築家は人工物を作っているのだから、人工物の美学というものにもっと自信を持つべきなのでしょう。

ではどうやって建築に、自然である植物を取り込んでいくのか…。やはり思想が重要なのだと思います。先ほども言いましたが、自然と人間の共生ではなく、建築に植物が寄生する…これが美しいのではないのでしょうか。僕が気に入っている例で言えば、棟にニラが生えたもの、かつて日本中で見ることできた萱葺き屋根にユリ、イチハツ、イワヒバなどの植物を人工的に植えた芝棟などがあります。これは防寒のために屋根に土を載せ、その土が流れないように草を生やしたのが始まりといわれています。この芝棟はフランスのノルマンディー地方にもありますが、世界でこの2例だけです。



⑦ 植物を寄生させた
萱葺き屋根

藤森流建築実践パート2、自然そのものを取りこむ住宅建築

●一本松ハウス

さて、建築物にいかに植物を寄生させるのか。

「一本松ハウス」を例にお話しましょう。お施主さんは、自宅が明治期のすばらしい邸宅で重要文化財になるので今度は瀟洒な家を建てたいというゆとりのある方でした。とはいえ、芝棟の屋根の天辺に松を植えようなんていう突飛なアイデアを受け入れてくれるものかどうか、僕は臆病になっていました。そして、これ以上結論を後に延ばせないという段階に入って、僕はスケッチ片手におずおずとその話題に入ろうとしました。するとお施主さんから「藤森さん、屋根の天辺には何を植えるんですか？」と言ってくれました！ 僕が芝棟とかノルマンディーの民家の写真とかをお見せしていたので、予感していたのでしょう。結局、お庭の松の苗から1本を選んで屋根の天辺に植えました。出来上がったものを見てお施主さんが大笑いして喜んでくれたのでホッとしました。室内には板材を使いましたが木造の室内の大壁は必ずひび割れが起きますので最初からひび割れを入れました。お茶を嗜む方でしたから、不揃いとかゆがみの美学の理解があったのです。



⑧ 一本松ハウス

●タンポポ・ハウス

屋根の天辺だけの寄生ではつまらない。もうちょっと大胆にしてみたのが「タンポポ・ハウス」、僕の自邸です。タンポポ仕上げを実現するまでには前段があります。僕は、屋上庭園という方法では人工物に自然が寄生するというコンセプトは果たせないと結論づけました。それならば超高層ビルの壁面緑化、つまり超高層ビルの蔦仕上げというアイデアを真剣に考えていました。ところが蔦は冬には枯れてしまい見苦しい。そこで枯れても風情のある雑草＝タンポポ仕上げを思いついたのです。花の後の綿毛もきれいでしょ、というわけです。このアイデアを自邸の設計に採用しました。当初は家の全面をタンポポ仕上げにと計画しましたが、そうすると我が家は屋根から壁まで年中びちょびちょと湿った状態になってしまうし、タンポポが成長しすぎたら僕らの手におえないかもしれない。妻もなんとなく不安そうです。何枚もアイデアスケッチを書いた後、タンポポと鉄平石のマダラ仕上げという案に落ち着きました。



⑨ タンポポ・ハウス
屋根の施工風景

室内は素材感を強調するために床、壁、天井と米松や人工乾燥のナラ材を使ったので、ひび割れや隙間が生じることをあらかじめ想定してその部分には漆喰を詰めました。隙間ができたならその都度漆喰を塗っていけばいいわけです。「タンポポ・ハウス」が完成してみると予想外の自体がいくつか起きました。まずタンポポに関しては、ちゃんと根付いて花も咲きましたが、綿帽子はだめでした。それから、タンポポは下から見上げる植物ではなく、足元に咲く可憐な花を眺めるのが良いのです。また、この家は典型的な郊外住宅地にありますが、周りに建つ軽くて薄い造りの住宅と比べると圧倒的に濃くて重いせいで、存在感が強すぎて変に目立ってしまうんですね。



⑩ タンポポ・ハウス全景

●ニラ・ハウス

最後は友人、赤瀬川原平邸の「ニラ・ハウス」です。いろいろ試してみて、植物が建物に産毛のように寄生している風景が僕の理想であって、そのイメージにもっとも近いのが「ニラ」であると確信していました。さらにニラをポット状に植えればスーッと空に向かって生えるだろうと予想しました。

ニラ・ハウスの敷地は斜面になっていたので、2階部分が玄関というプランになります。基本的にはなるべく普通の家を作ろう、けれども屋根にニラを植えること、道と玄関を結ぶブリッジは跳ね橋にすることを提案し、ニラ屋根だけが実現しました。建築作業はできるところは

なるべく自分たちでやろうということだったのですが、赤瀬川さんの友人や知り合いが面白がって手伝ってくれたことは嬉しかったですね。内装は僕の家でやった米松を基調とした板張で隙間やひび割れ部分に漆喰をつめました。茶室も作りました。茶室の天井には薪を貼ってその隙間から光が漏れてきたらさぞや綺麗だろうと考えました。レンガでアーチを組むように、天井に薪をアーチ状に押し込んでいけば相互の内圧で形を保つわけです。天井に貼る沢山の薪は仲間たちで作りました。最後には32人くらい集まってきて、作業風景は壮観でした。さて、家ができて困ったことは、住宅の正面ともいべき玄関に面した道路のガードレールが、どうもニラ・ハウスの外観と釣合わないことでした。仕方なくガードレールを金網で覆ってその上に芝生を植えてみました。最初はどうか心配でしたが上出来でとても綺麗です。「ニラ・ハウス」は国籍不明の雰囲気ですが、茶室の屋根に整列したニラの姿は予想をはるかに超えているし、それが風に吹かれて一斉に揺れる様は実に美しいものです。



⑪ ニラ・ハウスと
ガードレール



⑫ ニラの花咲く屋根

以上

1999年第8回物学研究会レポート
藤森照信氏（東京大学生産技術研究所教授）講演
「藤森流超近代建築論」

写真・図版提供

①；物学研究会事務局
②～⑫；藤森 照信 氏

編集=物学研究会事務局

•

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および
商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの
無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1999 Society of Research & Design. All rights reserved.